Osaka University Knowledge Archive

Title	カトマンドゥ盆地に保存されるミティラー語演劇写本『マダーラサー姫の誘拐』（その１）
Author(s)	北田, 信
Citation	印度民俗研究. 2014, 13, p. 65-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27068
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

カトマンドゥ盆地に保存される
ミティラー語演劇写本
『マダーラサー姫の誘拐』（その１）

北田　信

前号（第 11 号 2013 年）の拙稿では、カトマンドゥ盆地に保存されるベンガル語およびミティラー語の古い写本について述べた。今回は、実際にカトマンドゥ盆地内の古都バクタプルで作成された演劇写本を扱う。

毎年、雨期のさなか、ネパール歴バドラ月（8－9 月）になると、カトマンドゥ盆地のネワール族の住む都市では、ガイ・ジャットラ（牛の行進）とよばれる祭りが行われる。牛の角をつけた背の高い藁製の神輿と、飾り立てたリヤカーに牛の人形を載せた山車を先頭とするグループが、幾つも連なって街の中を練り歩く。行進する列にはドラム・シンバル・笛からなる楽団が加わっており、行進の音頭を取る。行進する人達は、手に木の棒を持ち、二人一組になって、相手とリズミカルに打ち合わせる。口々に「ゲン・タン・ギ・シ・トワン！」「ゲン・タン・ギ・シ・トワン！」というネワール語の掛け声を叫び、急な起伏の多いネワールの煉瓦造りの都市の狭い路地を進んでいく。ただでさえ狭い路地は見物人であふれかえり、たいへんな騒ぎである。

バクタプルでは、ガイ・ジャットラの期間中、夕方になるとあちこちの区画の辻で、市民たちによる滑稽劇が催され、たとえば女性に振られてばかりいる間抜けな男、というような演目が、歌と踊りで披露され、観客の笑いを誘う。たいていは他愛も無い寸劇程度のものだが、かつては演目は長めのものもあり、時には世相を風刺する内容のものもあった、という。残念ながら、このような市民劇の伝統は、近代化によって近年は廃れつつあるという。

伝説によるとガイ・ジャットラを始めたのはカーンティプル（今のカトマンドゥ市）の王プラターパ・マッラ（治世 1641－74）であるという。あるとき子供が死んでしまい、妃の嘆きはなかなか静まらなかった。そこで、プラターパ・マッラ王は一計を案じ、街じゅうからその年に死者を出した家族を呼び集め、一家につき一頭の牛を引き連れて街じゅうをぐるりと行進させた。そのようすを王宮の階上から眺めていた王妃は、行進の歌や踊りに心が慰められ、また、牛の数が多いのを見て、親族を失ったのは自分一人ではないのだ、死とは、身近なものなのだ、ということに気付く。こうしてようやく妃の悲しみが癒されたのだ、という。

今日のガイジャットラもこの伝説通り、牛の神輿[1]と山車を出すのは、その年に身内を亡くした家族である。牛は、亡くなった身内が姿を変えたものなのだ。神輿には亡くなった人の遺影写真が額に入れて懸けられる。大抵は年寄りのものだが、中には二十代の写真もある。ガイ・ジャットラは、遺族たちが悲しみを忘れる祭りでもある。激しく打ち鳴らされるドラムも、踊りも、そして夕方催される笑いに満ちた滑稽劇も、悲しみを紛らすためにあるものなのだ。

ネワール族の舞踊神ナソー・ディヨー (Nāsaḥ dyaḥ) （シヴァ神と同一視される）は両極端の性格の持ち主であって、歌舞音曲を司ると同時に、怒らせると祟りがある疫病神なのだという。まさにそのように、歓楽と笑いは、不幸と裏腹なのだ。

ガイ・ジャットラなどの祭りの日に行われる音楽・舞踊や演劇は、マッラ王朝時代の芸能に起源を持つと考えられる。ガイ・ジャットラと直接つながりがあるかどうかは分からないが、カトマンドゥ盆地には演劇の台本を記した写本が数多く残っている。

『マダーラサー姫の誘拐』Madālasāharaṇa は、マッラ朝時代のカトマンドゥ盆地で人気があった舞踊劇のひとつである。ガンダルヴァ族（半神族）の王女マダーラサー姫の誘拐と救出、死と蘇生の物語は、サンスクリット語の古譚集マールカンデーヤ・プラーナの第 20 章から 25 章に入っている[2]。粗筋は次のとおりである。

シャトルジット王の息子リタドヴァジャは、クヴァラヤという名

---

[1] 山車に載っているのはコブ牛の模型だが、藁製の神輿の方は、尖端に水牛の角が付いており、目鼻を書いた紙を貼って、顔としている。つまり、神輿の方は、むしろ水牛に似ているような気がする。ガイ・ジャットラの民族学的研究を参照してみなければ確実なことは言えないが、もともと水牛をトーテムとする信仰があり、これが後になって（ヒンドゥー教の影響を受けるなどして）牛になったのではないだろうか。なお、幾つも出される藁製の神輿の先頭、一番大きなものは、バイラヴァ（シヴァ神）と呼ばれる。

[2] マールカンデーヤ・プラーナに所収のマダーラサー姫の伝説については、横地優子氏（京大）に御教示いただいた。深く感謝いたします。

の魔法の馬の助けを借りて、ガーラヴァ仙人を救出し、さらに地底の国に降りて行き、悪魔パーターラケートゥを退治し、そこに囚われの身となっていたガンダルヴァ（天の楽人）族の王女マダーラサー姫を救出し結婚した。その結果、彼は“クヴァラヤ馬の飼い主”という意味のクヴァラヤーシュヴァというあだ名で呼ばれるようになる。

ところがある時、ひとりの悪魔がマダーラサー姫に「クヴァラヤーシュヴァ王子は死んだ」という嘘の知らせをし、そのショックでマダーラサーは死んでしまう。

クヴァラヤーシュヴァ王子と幼少期から非常に仲の良かった竜（ナーガ）族の二人の王子は、父親なるアシュヴァタラ竜王に助けを請う。するとアシュヴァタラ竜王は、弁才天に懇願して詩と音楽を完璧にマスターし、さらにシヴァ神に懇願してマダーラサーを蘇生させてもらう。アシュヴァタラ竜王はクヴァラヤーシュヴァ王子を竜族の住まう地底の国に招待し、マダーラサーを彼に帰してやる。

この古い伝説はカトマンドゥ盆地の作家たちの興味を大いに惹き、複数の戯曲が著された。一番初めに作られたのはサンスクリット語による戯曲『マダーラサー姫の前世の記憶』Madālasājātismaraṇa である。ハンブルク大学の Anja Mohrdiek 氏が翻訳を作成中である。これは、ところどころ稚拙な点がありながらもサンスクリット美文体を模倣して書かれたものである。

筆者は、マダーラサー姫の物語を題材としたサンスクリット以外のヴァージョン、すなわちミティラー語ヴァージョン（Manuscript No. 1-1696, Reel No. A346/30[3]）と、二つのネワール語ヴァージョン(Manuscript No. 1-354, Reel No. A349/7; Manuscript No. 4-937, Reel No. A346/8)を調査した。ネパール・リサーチセンターにおいて、古典ネワール文学・写本学の専門家カーシーナート・タモート(Kashinath Tamot) 博士と、これらの写本

[3] ネパール国立写本館(National Archives Kathmandu Nepal)所蔵の写本の番号が Manuscript No.である。この写本のマイクロフィルムを Nepal German Manuscript Preservation Project で注文する場合、写本をマイクロフィルム化した時の番号が必要になる。これを Reel No.という。

を解読・研究した。本稿は、この共同研究の成果である。本稿では、ミティラー語のヴァージョン (Manuscript No. 1-1696) の前半部を訳出・研究する。写本のタイトルは、Madālasāharaṇa-nāṭaka『マダーラサーの誘拐劇』であり、著者はバクタプルのジャガッジョーティル・マッラ王 (Jagajjyotir-malla 治世 1614-1637)[4] である。彼はネワール人の王であったが、当時の文学語であったサンスクリット、ベンガル、ミティラー語に通じ、自ら戯曲を創作し、また、文芸・芸能の振興者であった。

以下に、前半部を訳出する。原文は古いミティラー語であり、綴りにはネワール語の発音の影響がみられ、解釈に苦しむ箇所も少なからずあった。訳文は時には直訳調であるかと思えば、意訳になってしまったところもあり、改善の余地があるかと思うが、現時点ではこれが筆者の力の及ぶかぎりであることを、ここにお詫びしておきたい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

śrī gurūbhyo namaḥ // śrī paradevatāyai namaḥ // śrī sāvaraṇārddha(2 recto)nārīśvara nṛtyānanda svarūpebhyo namaḥ //
吉祥なる師匠たちに敬礼。吉祥なる最高神格に敬礼。吉祥なる両性具有の主神[5]にして、舞踊の歓びを本性とする御方に敬礼。

//atha rājā praveśaḥ//
//goḍagiri rāga//e//
nṛpati śaturajite dela paraveśa, jinala dahao diśa kichu na kaleśa //
ahita dalana kae durita vidāri, rākhava dharama patha varaṇao cāri //
sāma dāna bheda kae dhari nṛpa nīti / karava sakalajana manahi pirīti //
nṛpa jagajoti mala kahathi vicāri, sava rasa bhajava moñe eha tripu(3 verso)rāri //
（王の登場）

---

[4] ジャガッジョーティル・マッラ王については Brinkhaus 2003, p.70 を参照せよ。
[5] sāvaraṇa は意味不明。savarṇa の可能性もあるが、解釈不可能。

ゴーダギリ・ラーガ　エーカ・ターラ[6]

シャトゥルジット王が登場した。その彼にとって[7]、十方位に苦悩はない。

不正を粉砕し、悪者を裂き、四種姓による正義の道を敷こうとする。

平等、布施、区別[8]を行って王は政治を保ち、すべての人々の心に歓びをもたらそうとする。

ジャガッジョーテイ・マッラ王は熟考して言う[9]。「私はこれらすべての美的情感 (rasa) を味わおう。三都の敵[10]よ！」

//nacārī// kauśika//e//

jāhi janākā dharamahi cīta, se mora sahaja sahodara mīta //

sampati dāna bhoga nāsahi jāe, avasara eka pae dharama sahāe //

nīlakaṇṭha mohi kumati na deha, tohara caraṇa pae, karava sineha //

nṛpa jagajoti mala juguti vujhāva, bhavaka bhagati vinu āna na sohāva //

ナチャーリー[11]、カウシカ[12]・ラーガ、エーカ・ターラ

行けジャナカよ！正義に意識を［置いて］。彼は私の生まれなが

---

6 これは舞踊劇であり、登場人物の台詞の多くは歌詞である。それぞれの歌詞には、それが歌われるべきラーガ（旋律形）とターラ（リズム形）の指示がある。

7 jinala は定かでない。便宜的に関係代名詞として訳した。

8 あるいは「平定・贈与・打破（戦い）」この箇所は、法典類や実利論に典拠があるのかもしれない。

9 新期インド・アーリア諸語の詩では、詩の最後の行に、詩の作者や庇護者の名前を入れ込んで、結論とする。これを bhaṇitā と呼ぶ。ここではバクタプルのジャガッジュヨーティル・マッラ王の名を歌い込む。

10 シヴァ神のこと。天・中空・地面に金・銀・銅で作られた阿修羅の三つの都を燃やし尽くした、という伝説に基づきこう呼ばれる。

11 nacārī 不明。歌謡形式名か？“舞踊の歌”というような意味だろうか。

12 現代の北インド古典音楽には、カウシキーという哀愁とロマンスに満ちたラーガがあり、実際に演奏される。

らの兄弟(はらから)、友［のようだ］。

富も布施も享楽も消尽してしまう。唯一のチャンスを得て、正義だけが助け。
蒼い頸をしたシヴァ神が私に悪意を抱かないように。汝の御足を得て私は愛情を捧げましょう。

ジャガッジョーティ・マッラ王は理(ことわり)を理解させる。「シヴァ(bhava) に対する献身以外、他はよろしくない。」

he priye, ehana rājā moñe, śatrujit //

おお愛する女(ひと)よ、これなる私はシャトルジット王であるぞ[13]。

//ślokaḥ//
sa me mitraṃ sa me putras tāni bhṛtyāni sā priyā /
yā dharmmaikāgra-cittasya, dharma sāhāyakaṃ caret //
頌：これは私の友、これは私の息子、これらは家来たち、
これは、正義に専心する［私の］正義の協力をしてくれる[14]愛妃である。

he priye, he vipra, he putra, etādṛśa śatrujit rājā hame //
おお愛する女よ！おおバラモンよ！おお息子よ！このように[15]私

---

13 舞台上で王妃に呼びかけるという体裁を取りながら、演者が、自らの役柄を観客に告知する。この後に続く頌 (śloka) も、舞台上に勢ぞろいした演者たちをそれぞれ指さしながら、観客の為に役柄紹介を行ったのであろう。
14 yā … caret (3 sg.) を、sā priyā に相関するものとして解釈したが、文脈から、直前に列挙された「友、息子、家来たち、愛妃」すべてを受けるものと解釈することも可能であろう。その場合は、「これは私の友、これは私の息子、これらは家来たち、これは愛妃。彼らは正義に専心する［私の］正義の協力をしてくれる。」と訳せる。
15 役者は、王という役柄にふさわしい衣装や持ち物をまとっており、それを示したのであろう。

はシャトルジット王であるぞ。

(3 recto) priye kahahu // priya satya // dvija kahu // dvija bhala // putra kahu // putra satya // he dvija //
王「愛する女よ、言いなさい」　王妃「愛する方、御意」　王「バラモンよ、言え」
バラモン「御意」　王「息子よ、言いなさい」　王子「御意」　王「おお、大臣よ」[16]

(dharmmaikāgra-cittasya me mama, yā dharma-sāhayakaṃ caret, sā priyā sa me mitraṃ, sa me putraḥ sa tāni bhṛtyāni //)
正義に専心する私の、私のもの、これが、正義の協力をしてくれる愛妃、これが私の友、これが私の息子、これらが私の家来たち[17]。

he priye, ihāñe etae rahū, hame sabhā jāichao //
王：おお愛する妃よ、ここに居なさい。私は会合に行ってくる。

//korāva//pra//
sabhā saharakhe jāeva tahā, sujana saṅgama hoeta jahā //
コーラーヴァ・ラーガ、pra[18]
　私は、善き人々が集う、会合に行く[19]。

//koṇa bhāṣā//　　（舞台の角で言う[20]）

---

16 舞台上に並んだ演者たちひとりひとりに呼びかけて、返答をさせた。おそらく観客に、どの演者がどの役柄を演じるのかを、再度、紹介したのであろう。
17 前出の頌が、前半句と後半句をひっくり返して、再び言われる。ただし、写本においては、この頌は括弧に入れられている。この括弧の意味は分からない。
18 ターラ名の略号だと思われるが、正式な語形は不明。チャチャー歌で演奏されるターラ名の表 (pañca-tāla) は、マッラ朝時代に演奏されていたターラを集めたものだと考えられるが、そこには pra で始まるターラ名称は含まれていない。[Ratnakājī Bajrācārya 1999: 253ff]
19 saharakhe は不明。

he putra, rājākā sabhā caritra avaśya vicārae cāhia //
おお息子よ、王の会合　役柄を考える必要がある[21]。

//koṇa bhākhā//　　（舞台の角で言う）
avaśya calū //　　行かなくては[22]。

//rāgana paiśāra//　　（ラーガにより[23]登場）
//koṇa bhākhā//　　（舞台の角で言う）
he mantri, he dvija, sabhāsthāna calū //
王：おお、大臣よ、おおバラモンよ、会合の場所に行こう。

//koṇa bhākhā //　　（舞台の角で言う）
sa(3 verso)bhāka ehena lakṣaṇa //　（舞台はかくかくしかじかの特徴をもっている[24]）
he dvija-vara ehi thāsa khana eka viśrāma karū //[25]
王：おお優れたバラモンよ、この場所で一刻休憩しよう。

---

20 字義どおりには「隅の喋り」。この頃のステージは三角形をしており、その角の一つでいう台詞のこと。
21 意味不明。演者が自分に割り振られた役の性格 (caritra) をよく考えて演じなくてはならない、ということか？あるいは、王の会合において、事件 (carita) を吟味しなくてはならない、ということか？
22 王の台詞と解した。王子が王に応えたと解せないこともないが、calū 命令法二人称単数は、息子から王に対する言葉としては少々乱暴。写本においては 4 つほどの文字を抹消して書きなおした跡があり、最初の文字は ka だったものを ca に訂正したように見える。たとえば、もし仮にもともとここに karū と書かれていたのだとすると、前の王の台詞に対する返答となり「きっと考えなさい」というような意味になろう。
23 ラーガには男性的な旋律 (rāga) と女性的な旋律 (rāginī) があるといわれ、人格化して説明されることがある。細密画には、ラーガを男性や女性として人格化して描くものがあり、ラーガ・マーラー絵画と呼ばれるジャンルをなす。これはもともと、ラーガが演劇の伴奏として、様々なシチューエーションや情感を表現したり、また、登場人物のそれぞれの性格や雰囲気を音楽的に表現したりしたことにあるのではないか、と思われる。
24 意味不明。舞台の特徴を口頭で説明したのであろうか。
25 上側欄外に書き足してある。

ati uttama //
バラモン：たいへんよろしい。
he dvija-vara, uttama kahaichī //
王：おお、バラモンよ、そのとおりであるぞ[26]。
//gāchena pihāya//　　（幕より外に出る[27]）

he putra, mantri, koṭavāra, sāvadhāna bhae rājya cintā karaha //
gālava ṛṣi torāñe ānaha //
he ṛṣīśvara, he āsana baisū // he ṛṣirāja, morā parama bhāgya, āja apane ki ninte etañe vijaya kaela // i ghoḍa khaḍga kahena // he ṛṣirāja, moraño kichu (4 recto) gocara　//
王：息子よ、大臣よ、警備隊長よ、注意深く王国の世話をしなさい。
お前たちはガーラヴァ仙人[28]を連れて来なさい。
仙人たちの長よ、お座りになられよ。仙人たちの長よ、［あなたが来たことは］私にとり最高の栄誉です。今日あなたはどんな御用でこちらにいらっしゃったのですか？この馬と剣はなんですか？仙人たちの長よ、私にはさっぱりわからない[29]。」

//mālava//co//
mohi rahaite tua nahi anucita hoa, ehi nahi karaba sandeha,
sabe kichu hamarañe hāka so ādhina, dhana jana je cāhaleha //
deva dvija pūjita hamarā //dhruvaṃ//
dharama karama jata jīvahu sāhia ihe pae morā mana āsa,
puhavi rāja padavī avalambie kichu nahi guṇava ayāsa //

---

26 uttama kahaichī 直訳「私は最善を言う」。
27 ネワール語。舞台指示はネワール語でなされる。
28 ガーラヴァ仙人は、瞑想を悪魔に邪魔され、困り果て、風のように俊い神馬クヴァラヤを連れて、シャトルジット王を訪ね、助けを求める。シャトルジット王は、王子リタドヴァジャに、神馬に乗って悪魔を退治しに行くよう命じる。
29 moraño kichu gocara. 字義どおりには「私によっては、何か、知覚対象」「わたしには何かが目に入る」「私には何かが見える」というような意味になるのであろうが、意味をなさない。文脈から、便宜的にこの様に訳しておいた。

cāri varaṇa apanā patha rākhia nṛpati kaī (4 verso) save kāja,
suta mora sumati saṅge lae jāi abhaya janumā na ṛṣirāja //
caṇḍi caraṇava leke nahi santara cintā jaladhi apāre,
hareka arādhana kī nahi pāia, nṛpa jagajoti avadhāre //
マーラヴァ・ラーガ、co[30]

私がいるからにはあなたに悪い思いはさせません。このことを疑わないでください。
私のものはすべてあなたに属します。人であろうと富であろうと、あなたが望んだなら。
私は神々や再生族（バラモン）を丁重にもてなします。（リフレイン）
私が生きているかぎり、この世において正義の行いが完成されるように。私の心にこのような願いを抱いて、
大地の王［である私］は、道を延ばして、少しも美徳を怠るところがない。
王はあらゆる仕事を果たし、四種姓をそれぞれに相応しい道に置いた。
私の息子が良い心（sumati）をもって連れて行く。恐れるなかれ[31]（？）仙人たちの長よ。
「チャンディー女神の足元にすがるなら、渡れないほどの大海を渡るときにも心配がない。
どんな願いでも叶えられないことはない。」とジャガッジュヨーティル王は考える。

//gītārthaṃ śrāvayati//　　（歌詞の意味を説明する）
he munīśvara, hamarā achaite, ihāka kaona cintā, morā prāṇa hutaha adhika putra, ṛtadhvaja, saṅga lae yajña karū //
王：おお仙人の長よ、私がいるのですからこのことで少しもご心配なさるな。私の命よりも大切な息子リタドヴァジャを一緒に連れて行き、祭式を行いなさい。
//ṛṣīśvara, sarvathā // (5 recto)

---

30 ターラの名称らしい。現代の北インド古典音楽にも cautāl と呼ばれるターラがあるが、関連は不明。
31 janumāna 意味不明。

ガーラヴァ仙人：仰せのとおりに。
he kuvalayāśva, ī khaḍga, ghoḍa lae, ṛṣīka yajña sāṅga karū //
morā putra ati sulakṣaṇa, ṛṣika kāryya, avaśya kuru ekhane dhaola-hara upara gae rahava
paratāha // kī artha ī // ī nahi ucita //
王（王子に向かって）：おお王子よ、神馬クヴァラヤはお前のものだ。（これからはリタドヴァジャという名を改めてクヴァラヤーシュヴァと名乗りなさい。）この剣と馬を取って、仙人の祭式を手伝って来なさい。私の息子［であるお前］は非常に優れた美徳の持ち主であるから、仙人のお仕事をきっと果たすであろう。私はここ白亜の宮殿の屋上に行って見ていよう[32]。・・・これはどうしたことだ？これはまずい！[33]
//varālī//pra//
phulala kamala-vana daha diśa dekhi, madhupa dhāva madhu-pāna apekhi //
ke tāhika hia nivārae pāra, ehi samaya sava manahi vikāri //
avasara jāni karia dhanimāna, je nahi punu parihāsa(5 verso)e āna //
dui lahu dui guru śithila vajāva, manthara jati nṛpa jagajoti gāva //
ヴァラーリー・ラーガ、pra[34]

ハスの茂み一面に花が咲き誇っているのを見て、蜂は蜜を飲もうと飛びまわる。
このようなときにどうして心を抑えられるだろうか？この時期、すべての心は変化する。
チャンスを知って、用心深く、他人の物笑いの種にならないように。
二つの軽い音節と二つの重い音節を緩やかに弾きましょう。
ジャガッジュヨーティル王はゆっくりと歌う。

he priye toha, chāḍi, āna priyā nahi // he priye, strī-jāti aprabodhya //
王：（妃に対し）おお愛しい女よ、そなたをおいて他に愛しい者は

---

32 paratāha 意味不明。
33 望ましくない事件が生じているようだが、よくわからない。
34 ターラの名称らしい。

ない。おお愛しい女よ、女性とはなだめにくい[35]ものであることよ。

//mālava//lāṃja//

kate kauśalai hame bodhalihe āja, kie nahi mānala tua nahi lāja //

suna suna sundari boli kichu mora, dina dina ghaṭatahe jauvana tora //

piśuna vacana jadi dhaelaha kāna, jata kichu vahi gela (7 recto) tohara geyāna //

nṛpa jagajoti mala ī rasa bhāna, samaya vicāri karia dhanimāna //

マーラヴァ・ラーガ、lāṃja（ターラ）

今日わたしはなんと良く理解したことか。［自分が］しでかしたことを認めないで、君は恥も知らない[36]。

美しい女性よ、私の言葉をちょっとは聞きなさい、君の青春の美しさは日に日に擦り減っていくのだよ。

君にもし厳しい言葉に傾ける耳があったなら！君の分別はすでにどれほど流れ去ってしまったことか！

ジャガッジュヨーティル王はこの美的情感 (rasa) を語る。時節 (samaya)[37] を吟味して注意しながら。

he priye, prāṇa-priyā toñe māna na kara //

he devi, hamarā dakṣiṇa vāhu spanda, ehana hoicha, je bandhu darśana ho //[38]

he priye, khana eka etae viśrāma karava //

vatsa ihā kuśala thī, katavā katavā karmma bhela, ī kahu //

sādhu sādhu putra //

---

35 a-prabodhya lit. ‘not to be awakened’. あるいは、次に続く詩の内容から「分別をもたせることができない」か？

36 若さは永遠ではないのだぞ、と、現世的快楽の儚さを教え諭す教訓詩のようにも見えるが、教訓詩と見せかけて、女性を口説く歌でもあり得る。「君は僕につれなくするが、そうやってツンツンしているうちに、歳を取っちゃうぞ」というように。

37 あるいは、「こうあるべき」というしきたりをわきまえて。samaya は「作詩上の規則、決まりごと」という意味にもなる。美的情感についての作詩あるいは演劇学の規則をきちんと遵守しながら、劇を演じる、という意味かもしれない。

38 上側欄外に書き加える。

王：おお愛妃よ、命ほど大切な人よ、君はそんなに拗ねるのをやめなさい。
あれ妃よ、私の右の腕が痙攣している。これは、親族に会うだろうという前兆だ[39]。愛妃よ、しばしここで休憩しよう。
［王子が現れる］
息子よ、お前は元気であったか？どんな出来事があったか、話しなさい。でかしたぞ、息子よ。
āsāvarī//co//
tanayaka guṇa ho tīnī, save nāhi sama ho ke nahi jānī //
tātahu taha ho adhīre, uta(6 verso)ma rāma daśaratha taha dhīre //
madhyama ke kaehe nīti, tātaka sari kae dhara sava rīti //
sehe adhama pajāī, bāpaka guṇa yaśaha lae ghaṭāī //
nṛpa jagajoti mala gāve, śiva hia rādhi utama suta pāve //
//gītārthaṃ śrāvayati//
アーサーヴァリー・ラーガ、co（ターラ）
息子というものには三種類あり、一様ではない、ということは誰もが知っている。
父親に勝るもの[40]は上等の者。ダシャラタ王の息子ラーマのように落ち着いている。
中くらいの息子は何事においても父親のやり方に倣って政治を行う[41]。
下の子供は父親の徳や名声を減らしてしまう。
ジャガッジュヨーティル・マッラ王は歌う。「シヴァを心に崇めて上等の息子を得よ。」
（歌詞の意味を観客に説明する）
hamarā pūrvva puṇyate uttama putra pāola //
āliṅgaṇa, śirasi cumbati //
王：私が前世に積んだ善行により上等の息子が得られた。（王子を抱擁し、頭に接吻する）
he putra baḍa sāhasa kaela (7 recto) hamarā kula, // ñehā kasana nahi bhelachae, ehi dhavalagṛha ehāñe rahū, hame dosara dhaolahara

39 男性の身体の右側が痙攣するのは吉兆だと考えられていた。
40 原文は意味不明。文脈により推定した。
41 不明な語句が多いが、文脈に従って推定した。

jāichao, ñehāñe āja saño dui pahara dhari, deva brāhmaṇa tīrtha tapasyā jata eho, sarvvatra savaka cintā karava, dui pahara upara prak candanādi roja[42] bhoga karava // etavā pratidina karava // leāe ānaha //
davalana piṃhāya//koṇa//[43]
王：おお息子よ、たいへん勇敢なことであった。［お前は］わが王家［の誇りである］（？？[44]）お前はこの宮殿に住みなさい。私はもう一つの宮殿に移るから。今日からここに住んで、２パハルの間、神々、バラモン、聖地などに祈りなさい。いかなる場所でも皆のことを考えてやりなさい。２パハル[45]の間、栴檀などを供えなさい。これを毎日行いなさい。持って来なさい[46]。
（舞台から外に出る。舞台の角で言う）
he priye aora dhavalahara jāeva calū // priye avaśya //[47]
//davala du//
王：おお愛妃よ、別の宮殿に行こう。」
妃：かしこまりました。
he priya tvarāñe jaeva calahu// priye avaśya // he rājñi, vatsa kuvalayāśva eta kāla ahi ānalachathi[48] //
王：愛妃よ、早くいこう。
妃：かしこまりました。
王：妃よ、愛息クヴァラヤーシュヴァが今、到着した。
he ṛṣīndra kimartha āgamana // (7 verso) kahū //
hari hara śiva śiva kaṣṭa kaṣṭa //
王：おお仙人の長よ、どのような用件でお越しになったのか？言いなさい。
王：ヴィシュヌ神よ！シヴァ神よ！ああ何と酷いこと！
he devi, otae putraka nidhana bhela, etae madālasāe prāṇa tyajala,

---

42 rājabhoga?
43 上側欄外に書き加える。
44 hamarā kula // ñehā kasana nahi bhelachae. 意味不明。強いて直訳すれば「私の家系（家柄）、ここにどうしてなかったか」。
45 古い時間の単位で、一日を 8 等分した時間、3 時間。
46 leāe ānaha 意味不明。
47 上側欄外に書き加える。
48 āelachathi とも読める。

kaone pāpe ī bhela //
王：おお妃よ、あちらでは息子が亡くなってしまった。こちらではマダーラサー姫[49]が生命を捨てた。［わたしたちが］どのような［前世の］悪業をしたというのだろうか？

//śloka//
he devi,
dhairyyaṃ vipadiṃ sampattau, kṣamā saṃyati vikramaḥ /
etāny utpatti siddhāni , lakṣaṇāni mahātmanāṃ //
おお妃よ、
（頌）「苦難のときも繁栄のときも［変わらず］忍耐、赦し、沈着、勇敢、これらの現れが偉大な人々の特徴であると知られている。」
he devi, pañcabhūtātmaka śarīra anitya, madālasāka saṃskarādi karmma karāu //
he rājñi mo(8 recto)ñe kichu kahaīchī, sunaha //
おお妃よ、肉体というものは五元素から成り、いつかは滅びるさだめなのだ。マダーラサー姫の葬式をあげてやりなさい。おお妃よ、今から私が言うことを聴きなさい。
//korāva//pra//
rodane ki hoa athira kalevara suta mita dhana jana dāra,
hamare vacane huni sāhasa sāhala duja deva kaela udhāra //
raṇa muhe sāmuhe vaṃśa udhārala, mora kula kala nikalaṅka,
deva dharama ṛṇa save huni nitarala dhoela pātaka paṅka //
mala-maya deha nāśa savahika hoa śocane se nahi pāa,
tejañoara (8 verso)jala vimala yaśo dhana kī phala punu paṁcatāa //
ī punu punu mati sahaje sarira teji kulamati madālasā nāri,
pahuka vioga dukha je nahi dekhale tinu kula lela udhāri //
nṛpa jagajoti bhana caṇḍi-caraṇa mana śiva pae eka śiva dāna,
pāpa karama jata ora na nivaraha phiri punu sehe dukha pāe //
コーラーヴァ・ラーガ　pra　（ターラ）
泣いて何になろう。肉体ははかないもの。息子も友も富も人も妻

[49] 悪魔が「王子が死んだ」という偽の報告を与え、マダーラサー姫はそれがショックで自死してしまう。

も私の言葉に (hunisāhasa[50])
(sāhaladuja[51]) 神が救済して（高めて）くださった。
(raṇamuhesāmuhe[52]) 家系を救済して（高めて）くださった。私の家柄は欠点がない。
神、正義、義務、すべて、（？？）罪の泥を洗い清め、救ってくださった[53]。
すべての者の肉体は汚れで出来ており、壊れる。嘆いたとて何も得られない。
(tejañoara[54]) 無垢の水
名声と富［が失われたことを］後悔してなんの得があるか？
良い家柄を持つ女性マダーラサーは夫からの別離という苦しみを直視できなかった。
先祖三代[55]を救った（高めた）。
ジャガッジュヨーティル王はチャンディー女神の足元で言う、
ただおひとりシヴァ神のみに心を捧げなさい[56]。
前世の悪いカルマの結果をすれば、それに［値する］苦しみを得ることになる[57]。

he devi, oñe vaḍa kāryya kaela, viṣāde, āve kī hoeta // (9 recto)
王：彼（＝王子は）偉大な仕事をなしたのだ。悲しむことに、い

---

50 sāhasa は、「勇気、思い切った行動、性急な行動」を意味する。
51 duja は dvitīya あるいは dvija と解せるが、この文脈に当てはまらない。
52 意味不明。*raṇa sāmuhe ならば、「戦いに直面して」と解せるが、文脈に上手く当てはまらない。
53 huninitarala 意味不明。便宜的に Skt. ni√stṝ「渡る」から派生したものとして解釈した。
54 意味不明。あるいは後ろとつながって arajala 動詞の過去形になるのかもしれない。
55 tinu kula“三つの家柄”タモート博士によれば「父、祖父、曽祖父」を指す。しかし、もしこの tinu を指示代名詞ととってもよいならば、文の意味は「彼女は家柄を救い取った（＝体面を守った）」という意味にもなり得る。
56 この歌詞は全体的に不明の個所が多い。
57 jataoraniravaha は意味不明。この箇所だけでなく、この歌詞は全体的に不明の箇所が多いため、文脈だけを頼りに推測で解釈した。

まどんな［意味があろうか］？
devi ehena//
王妃：そのとおりですね。
he devi, khana eka dharma carccā gamāu //
he devi, ihā ārāma pīpara gācha bhae, vamādīsa[58] kokila kuhakaicha //
//āliṅgana//
he vatsa cirañ jīva cirañ jīva, he putra āja kie averi bhela //
//paraspara mukha heri sthagita bhela//

王：おお王妃よ、しばし、［世の］ことわりについてよく話し合ってみよう。おお王妃よ、ここに休憩できそうなピーパルの樹があったぞ。ホトトギスがクークーと鳴いているぞ。
（抱き合う）
ああ可愛い息子よ！長く生きよ！長く生きよ！おお息子よ！今日はどうしてなかなかやって来ない[59]のか？
（［王・王妃］互いに顔を見合わせ、たちすくむ。）

［次号に続く］

参考文献

Brinkhaus, Horst, “On the transition from Bengali to Maithili in the Nepalese dramas of the 16th and 17th centuries”, *Maithili Studies. Papers presented at the Stockholm Conference on Maithili Language and Literature*, Department of Indology, University of Stockholm, 2003: 67-77.
Ratnakājī Bajrācārya (Sampādan): Pulāṃgu va nhūgu cacā-munā. Nigūgu bva. Ṣaḍakṣarī Mahāvihāra (Dugaṃbahi, Yaṁ), 1999.

---

58 vamādīsa 意味不明。
59 直訳すると、「今日はどうして遅延が生じたのか」。文脈から、王は、息子が死んでしまったという報せを自分に認めさせることができずに、こう言っている、ということになる。

本論文は科学研究費補助金・基盤研究（C）「カトマンドゥ盆地に保存されるベンガル語・ミティラー語演劇写本」(25370412) の助成を受けたものである。